平成３１年４月１８日（木）静岡新聞夕刊掲載

# 回復も、苦しみも共に

## 歩み続ける 平成から令和へ —3

## 間渕元子さん（静岡・看護師）

静岡赤十字病院（静岡市葵区）の副院長兼看護部長間渕元子さん(59)は看護師500人の司令塔を務める。力を注ぐ分野の一つが最期まで高齢者を地域で支える、地域包括ケアシステムづくり。長く歩んだ現場は生死を分かつ脳神経外科。後遺症を抱えた後の新しい生活をつくる「壁の重み」に向き合った経験が今、生きている。

「美智子さまは控室まで敷かれた赤いじゅうたんを歩きませんでした」。間渕さんは1985年、看護師に贈られる最高栄誉「フローレンス・ナイチンゲール記章」授与式に臨席するため会場入りする皇后さまを覚えている。当時皇太子妃で、主催する日本赤十字社の名誉副総裁。ご自身のためのじゅうたんは歩かず、会場を手伝う間渕さんらスタッフの列に歩み寄られたという。

幼い頃は獣医師か医師にと夢見た。中学3年の時、おばのがん闘病を機に思い直す。緩和ケアは普及しておらず、病院で痛みがつらくてナースコールを押す。「患者のもとに一番に駆け付けてくれたのは医師でなく、看護師だった」。大学進学を望む両親の反対を押し切り、高校を卒業して看護の道へ進んだ。

脳神経外科は脳梗塞やくも膜下出血、脳卒中を治療する。元気に家を出た人が、ある日突然倒れ、家族は電話1本で「倒れた」と告げられる。命は助かるのか、後遺症は残るのか、残るとすればこの先の生活は―。不安の中にいる患者と家族の傍らで看護師はかすかに手が動いたり、声掛けに反応したりと小さな変化を見逃さない。

後遺症を抱えた患者は、「できないこと」が増えた自分を受け止めることから再出発する。「回復も苦しみも共にたどらせていただく」と間渕さん自身も心に誓い、地域に戻る患者と家族の新しい生活をつくる。「乗り越える壁の重みこそが、人の役に立ちたいという気持ちを一層駆り立てる」と力を込める。

国が推進する地域包括ケアシステムは、急性期病院にも変革を迫る。治療を要する高齢者の早期回復を支え、退院後に必要なサービスを介護など多職種と連携して一体的に提供する。「大丈夫、できる」と担当の看護師長を連日激励する。「人がいかに幸せに地域で『生き切る』か。中心役を果たせるのは、患者の健康も生活もみることができる看護師」

日赤は「人道」を重んじる。いかなる状況下でも人の命を救い、苦痛を取り除き、尊厳を守る。間渕さんは皇后さまの行動に人道の実践を見た。「スタッフの一人一人までも大切にされる。看護師に対するリスペクトを感じた」と感激を胸に刻み、歩み続ける。

地域包括ケアシステムづくりを託す看護師長に指示を出す間渕元子さん＝3月、静岡市葵区の静岡赤十字病院

＜皇室と看護師＞　皇后さまは日本赤十字社名誉総裁。フローレンス・ナイチンゲール記章は2年に一度、世界中の看護師から赤十字国際委員会が受章者を決定する。

こちら女性編集室